



観音寺城跡

うつりかわり

近江の国は、日本列島のほぼ中央部に位置しますが、その近江の国でもまた中央、「日本のへソ」ともいうべき要衝に聳えるのが、標高 432.9メートルの観音寺山（織山）です。

この観音寺山に砦を構え、城を築いて、鎌倉時代・室町時代・戦国時代と、400年近くにわたって近江の国を支配したのが、近江源氏佐々木（六角）氏です。

佐々木氏は、宇田天皇の皇子敦美親王を祖とする賜姓皇族が、現在の八日市市小脇町の佐々木庄に土着したのが始まりといわれています。その後、源氏の嫡流である源為義と主従関係を結んだり、古代豪族の沙々貴氏を併

呑するなど、徐々にその地歩を固めていきました。しかし、その政治権力を確かなものにしたのは、鎌倉幕府草創に大きな勲功を立て近江国守護職に任ぜられた佐々木定綱（1142－1205）以後です。のち、佐々木氏は、湖南6郡を支配した嫡流の六角氏と、湖北6郡を支配した京極氏に分かれましたが、宗家を継いだ六角氏は、そのまま、先祖伝来の地である小脇の館を本拠としました。南北朝の内乱以後、周囲に堀や土塀をめぐらすなど、防御態勢を完備した館を中心とする戦闘から、守り易く攻めにくい山に城を築き、そこに立籠って戦闘を行う戦法が採られるようになると佐々木六角氏もしばしば観音寺山に拠って闘



池田丸発掘状況



観音寺城跡古絵図（木瀬市右衛門氏蔵）

いました。おそらく、この頃から観音寺山を城砦として使用し始めたと考えられます。しかし、その城砦は、観音寺山の山麓から山腹の処々に建てられていた観音正寺の坊舎を利用した臨時の城と、尾根に構えた簡単な防御施設の砦の両方を組み合わせた、いわゆる詰の城とよばれる戦闘用の城砦であったと考えられます。

ところが、応仁の乱以後、戦闘が日常化し、政治や経済が発展すると、平時は館・戦時は詰の城という生活では、多様化する戦闘や社会情勢に対応できなくなってしまいました。そこで、一朝事ある時は堅固な城郭となり、平時は政治、経済を支配する場となり、時には客をもてなし武将の権力を示威する殿舎となり、その上日常生活を営む住居ともなる恒常的な城が築かれるようになりました。

観音寺城も、その例にもれず、応仁の乱以後に、計画的な縄張りにもとづいて本格的な築城工事がはじめられたと考えられます。

観音寺城は、その殿舎が立派であっただけ

でなく、地選や地取りにもすぐれたきわめて堅固な城でありました。たとえば、覇者の道ともいえる中山道を掌中にする位置にあること、京都に近くまた伊勢、美濃、越前などにも短時日の行程にあること、また、この城を中心に和田山城、箕作城、長光寺城などの支城がとりまいていること、独立峰にもかかわらず水が豊かなこと、山上からの眺望がすぐれていることなど、その位置と地勢に理想的な条件を備えていました。それだけに、永禄11（1568）年、京都にはいるためこの城を攻めた信長も、相当な覚悟をもって戦闘に臨みました。しかし六角氏は、同族集団のまとまりの悪さから十分戦うことなく甲賀へ敗走したのです。

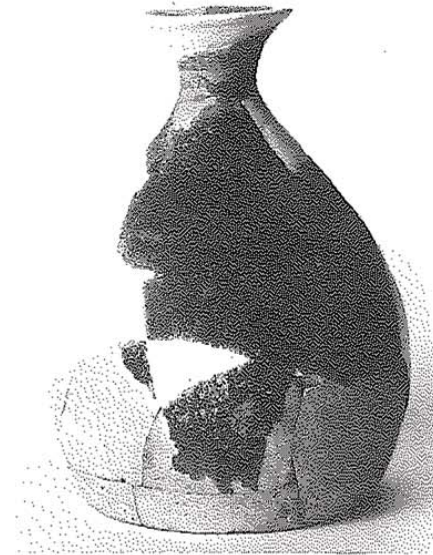
観音寺城跡の調査

観音寺城は、これまで一部の城郭研究家には知られていなかった幻の城でありましたが、昭和44・45年に、近江風土記の丘建設ともなう整備事業の一環として、本城と称される部分の発掘調査と、城郭の規模と構造を

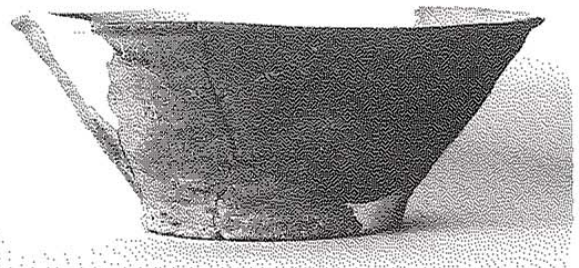


発掘された本丸石段と排水路

明らかにする遺構の確認調査が行われました。発掘された本城は、本丸、平井丸、落合丸、池田丸と呼ばれる四ヶ所の郭からなり、一部は二次的に手を加えられていましたが、いずれの郭跡からも、多数の建物跡と、側溝、暗渠排水、井戸、池、石段、城戸などの遺構が発見されました。中でも、平井丸で発掘された池泉式と推定される庭園と、池に張り出した茶室風の建物は、当時の知識人をしばしば招宴した六角氏の文人的性格の一面と、贅を尽したといわれる城普請の一端を髣髴とさせるものでありました。また、郭跡からは、灯明皿とよばれる多量の土師器をはじめ、信楽焼の徳利・土瓶・播鉢、天目茶碗、皿、壺、中国から輸入された染付の茶碗、皿、盃など往時の生活をしのばせる遺品が多数出土しました。これらの出土品が、越前一乗谷の朝倉氏の館跡からの出土品と酷似していることは、戦国武将の生活水準がうかがえて興味深いものがあります。また標高 400メートルを越す観音寺山の急峻な山腹や深い谷間、瘦せ



出土した徳利



出土した播鉢

た尾根など約 200万平方メートルの全山にわたって、総数1千を数える曲輪や見付、石垣や石段が累々と築かれ、その広大さにおいて、その築城規模の雄大さにおいて全国でも有数の山城であったことが十分うかがえます。

この観音寺山の一支尾根、安土山には、城郭史に一時代を画した安土城跡があります。中世を代表する観音寺城と近世を代表する安土城、この2つの城郭が同一地域に築かれていることは、当時いかにこの土地が重要であったかを示すとともに、中世から近世への激動の歴史が、この近江の国を舞台にして刻まれたことを教えてくれます。

むすび

この貴重な遺跡観音寺城跡は、乱開発に消えてゆく遺跡の多い今日、いまだ鬱蒼とした樹林にかこまれ昔を語ってくれます。将来史跡として、教材として、憩の場として多くの人人に親しまれるよう大切に保存、整備して永く後世に伝えていきたいものです。

(秋田裕毅氏提供)

